# 独断砂防国際協力序説～その4

渡辺正幸*

私たちが住んでいる日本の社会と開発途上国の社会の大きな違いの一つは、人が死ぬ理由である。

戦争が日常化している実態は、スーダン、エチオピア、コンゴ等のアフリカ諸国、アフガニスタン、スリランカ等のアジア諸国にあり、カンボディア、フィリピン、インドネシアでも銃弾が日常的に飛び交っている。アイルランドや旧ユーゴを抱えている欧州も例外ではない。戦争の火種を抱えている国は世界中にある。

▼

“紛争を武力で解決しない”と誓ったわれわれの先輩とそれを守ろうとするわれわれの判断は正しい、と私は自分の戦場経験から信じているが、依然として武力で解決することを目指す人が現実には多いことも事実である。

とはいうものの、武力で解決した問題が全くないことも現実である。イラクやパレスチナの問題、中国と台湾の紛争ならびに東欧の民族戦争で砲艦外交や武力による威嚇が行われても問題は常に持ち越される。もはや武力で問題を解決する時代ではないのだ。

武力が解決の手段として認められ、武勇が誉められ、勝敗が決まり、その結果に服したのは力が正義とされ国際交渉の手段として公認されていた時代のことである。人間を家畜として使役した奴隷制度や自分の利益を確保するために競争相手の指を切断できる植民地を拡張する競争に狂奔した時代のことだ。武力で問題が解決するという考えは、幻想であり、時代遅れである。軍隊をもつこと、武器を使うことはもはや人類の発展に何の意味もない。

われわれの目標は、いかなる形態の戦争をもなくすことにおかれなければならない。非武装の場合には、攻撃されても応戦できず、殺されるかもしれない。東チモールで武器をもった独立反対派が無抵抗の住民を蹂躙したことが、この恐れが今も現実になりうることを示している。だからこそ、このような最悪の事態を政治家も国民も覚悟しつつ、全世界から武器を用いた暴力をなくする努力をするべきであり、その方法を考え実行するのが政治家の務めである。日本だけで安全を考えても、もはや意味がないのが現代の世界である。

▼

“金持ち喧嘩せず”というのは言い得て妙である。スイスは“今では”世界一の生活水準を誇る国である。言い換えれば金持ちの国民からなる国である。“今では”と言うのは、第1次世界大戦までは、スイスは欧州の最貧国であったため、働き盛りの男は周辺諸国へ出稼ぎにいった。職種は傭兵であった。中世から近世にかけての欧州は小国が乱立して互いに争ったため、スイス人傭兵同士が敵味方に分かれて殺し合うという悲哀を味わっている。ローマ法皇庁があるバチカン市国の警護がスイス人の護衛兵に任されているのは、当時の名残りである。

豊かな現在のスイスには、地球の各所で憎み合い戦っているはずのあらゆる宗教が揃っていて、平穏な日々が過ぎている。誰も国家・宗教・肌の色を気にはしていない。共同生活のルールを遵守している限りは、一切の干渉はないという雰囲気がある。

争いをしていると、生活を豊かにする余裕は確実になくなる。21世紀には、社会を経済的に豊かにし抑圧を解消すれば戦争は起きないし、人口増加にもブレーキがかかると信じて良いのではないか。豊かな社会とは、単純に言えば、平均的に収入が大きいということである。収入が全てでは勿論ないが、人間らしい生活と平和が保たれるための第一条件であることは確かである。

収入を持続的に大きくしようとすれば、戦争は当然あっては困る。砂防や防災事業に関わる人は、ま

＊元建設省土木研究所砂防部長

パキスタン・パンジャブ州西部部族自治区の小学校の児童たち。テキストは回り持ちのものがあるがノートはない。木の板に炭で文字を書く。

ず平和を最も尊ぶ集団だ――いや、そうでなければならないという理屈になる。

砂防や防災事業でメシを食いながら、紛争は別の世界・別の次元の問題として武力の行使を是認するというのでは、辻褄が合わない。もう少し思慮をはたらかせて、日本国憲法第9条はわれわれのメシの種だと考えるべきなのだ。人類のあるべき未来を示しているものと考えるべきなのだ。因みに、国連の開発計画（UNDP）の人間開発報告は、この考えを基調にして作成されている。

▼

序説−1、2で述べたパキスタンの西部辺境州、ドーリ村はその後どうなっただろうか？

国連食糧農業機構のパキスタン代表部は、世界中に広告を出して、ドーリ村プロジェクトのマネジャーを募集し、500通の応募者の中からチュニジア人のモハメッド・アチョウリ氏を選抜した。アチョウリ氏は年齢45歳、アメリカのニューヨーク州立大学の社会学科でマスターの学歴と、これまでにアフリカや中東で農村開発プロジェクトをいくつか手掛けてきた経験をもつ。当然、英・仏・アラブ語に堪能で、コミュニケーションには不自由しない。しかし彼のアドヴァンテージはイスラム教徒だということである。

宗教の教えが価値観の中心である――それ以外の価値体系や制度がない――地域では宗教が根っこで共通であることが受け入れられ、信頼を得る条件になる。キリスト教徒やぐうたら仏教徒では、彼らの中に入れてもらえない。

アチョウリは村へ入って村人に語りかけた；

収入を増やすことが必要であり、それは可能である。われわれのプロジェクトは、村人の収入が持続的に増加して、いろんな面で生活を豊かにすることを目的にしている。

さし当たって、羊の牧草が年間とおして不足しないようにする必要がある。ついで、健康な羊を育てる必要がある。

でないと、羊は高い値段で売れないからだ。さらに、農作物を多様化する必要がある。収入の増加につながるし、危険分散になる。

また、農作物の収量を大きくし安定させるためには、水の供給を安定させる必要があるし、土壌侵食を防止する必要がある。

このような目出度い話には当然費用がいる。種、苗、指導者の雇用には金がかかる。プロジェクトは50%を負担できる。残りの50%は村人が自腹を切ることになる。

このような準備のための膝突き合わせた話し合いに1年をかけている。しかし、その間に与えた羊の虫下しの薬の効果は絶大であった。肉量が増え、肉質が良くなって、市場で高く売れた。寄生虫がいなくなった分、草の効率が良くなって、頭数を増やすことができた。この虫下しの実利効果で、村人がアチョウリの言うことを信頼するようになった。

▼

次の仕事は、草地を分割して、そのうちの1区画

は1年間遊ばせることであった。テリトリーの中で自由に放牧してきた村人にとって、草地を区画して利用してはいけない区画を作るという考えが住民にはなかったため、説得に時間がかかった。

虫下しの効果で乳の出も良いし、羊も太ってきた。金がかかることでもないから乗ってみるか？と、本当のところは半信半疑だったろう。

JICAはD.G.カーンの町に基地とする事務所を、ドーリ村に、プロジェクトの担当者が仕事し寝起きするための事務所、苗床、そして村に入る道路を作った。並行して水源に近い所に貯水（正確には土砂の空隙に水が溜まる）ダムを造った。

アチョウリの企画は当たった。村人は草地の区画に合意し、共同作業で作った計画に基づいて、石積みの柵が作られた。

次の企画は綿花の栽培である。自給用の小麦と野菜しか作った経験のない村人に勧められる作物は、なんといっても買ってくれる（売りにいく）市場があることである。苗床で作った苗を半額負担で農民は買った。ドーリの綿花は品質が良いとして高く売れた。並行して、村人はジャガイモ、人参等の野菜、レモンに挑戦した。岩漠の礫を丁寧に取り除き土を掘り出して新しい畑ができ、やがて拡張された。礫は集めて羊の進入を防ぐ石垣になった。木が植えられて強い直射日光を遮った。窪地は養魚池になった。

このような作業を、5人のパキスタン人専門家が忍耐強く指導した。作物が多様化するほどに、仕事量が増えて労働に切れ目がなくなってきた。それまでロバ1頭分の価値とされた奥さん・女性に、作業の手ほどきをしてほしいという要望がでた。女性の専門家を一人追加した。現地事務所の部屋を1つ空けて女性専用にした。

▼

こうして、かつての荒涼とした岩漠地域はみどり溢れる台地になった。1997年に私は現地を訪れた。それは驚きの連続であった。

道で出会った村人は、私に挨拶をした。握手をした。だれも銃をもっていなかった。みんな丸腰だった。道路に転がっている1匹のうさぎの死体を5人の男が囲み、それぞれが俺の弾に当たって死んだと主張する。決着は銃だ――という究極の貧困はどこへ行ったのか？

みんな集まっているから、来てくれという。50人ほどの男が壁にそって座っている。促されて中央に座った。2人を除いてだれも銃をもっていない。2人の銃も丁寧に布で巻かれていて、“寄らば撃つぞ”というようにはなっていない。これは画期的なことだ。

なぜならば、彼らは自らを武装解除している。「自発的軍縮」だ。どの国家もできないことを、彼らは自然にやっている！　これは人類史的な凄い出来事だ！　流域保全事業として始めた事業は、農業・農村開発になり、最後には軍縮事業になってしまった。

50人の男は近隣の5つの村から来ていた。互いにいろんな利害関係をもっていて、5つの村が一同に会することなどかつてなかったという。

集会の趣旨は、ドーリ村で実施したプロジェクトを、自分達の村にまで拡張してほしいという陳情であった。即答はできない。しかしドーリ村の現実を見た近隣の村人の気持ちはよく判るし、事業の成果が広まっていくこともわれわれの狙いである。しかし、われわれの手も限られている。対象が大きくなるほどに、われわれの手だけでは明らかに限界がある。どうしても地元の人の自助努力に委ねなければならないことが多くなる。

▼

知識・技術を手取り足取りで移転する段階を超えて波紋が広がるように普及するためには、普及の専門家だけでなく、対象農民の教育がしっかりしていないといけないと言った。増産できても算数や記帳ができないために作物の集荷・販売の整理ができず、仕入れた肥料の量や金額を誤魔化されて借金地獄に落ちた気の毒な農民の話を聞く。

愚民政策で国民の基礎教育に熱心でないパキスタンの現状ならびに将来は決して明るくない。

そのとおりだ、と村長が応じた。村長はその年から、孫2人を20キロ離れた町の学校にボーディングさせることにしたと言った。勉強させなければだめだということがよく判ったと言った。

砂防や防災はこのような人の努力を支えることができる。いや、このような理解にたたないと存在価値がない。

村は段丘化が進む氾濫原に乗っている。雨季の鉄砲水は段丘崖を削り河道が水平方向にシフトする。これは災害だ。折角の耕地が削られてなくなる。国

も州政府もこんな山奥にある山岳部族の村の洪水対策などするわけがない。当てにしてはいけない。

対策が必要だとなれば、自分で実行する以外に方法はない。それには、増産で得た収入の一部を出し合って積み立て、まとめて工事をする。自分の命は自分で守るしかない。

▼

この考え方、資金の出し方、積み立てる仕組みについて協議し制度化する。洪水災害に対抗する砂防の制度と技術を考えて実行できるようにする段階にきた、と思っていた矢先、1998年5月、パキスタンはインドとともに核爆発実験を強行した。核拡散防止を国是とする日本は援助を止めた。プロジェクトは中断された。

収入が増加したらその一部を貯金して災害に備える——これが災害に対抗する抵抗力の仕組みである。食えるようになったコミュニティが、災害が飢えの恐怖につながるということを認識して、その恐怖と対抗策を社会化する——共同責任を自覚するようになる。

食える希望とその幸せを共同で守ろうとする連帯意識、ここまできてはじめて、研修・防災教育・訓練・予警報システムが機能することになる。核実験がようやくここまで来たプロジェクトを止めてしまったのであった。

銃が紛争解決の最後の手段であった貧しい村の農民が、銃を無用の物として置いた。少しの資金と当たり前の技術とそしてやる気があれば、自分達の生活が向上することを住民は学んだ。銃に頼らなくても生きていけることを体験した。男と女が力を合わせれば、より豊かになることをみんなが学んだ。このような農民には核兵器は全く無用である。核兵器のために使う金の余裕は、彼らにはないのである。収益は耕地を守る砂防事業のために必要なのである。一体、誰が何のために核兵器を望むのか？

国民の大部分を占める貧しい農民の生活実態ならびにニーズと政府の対策の間には、明らかに巨大な、ナンセンスな、そしてスキャンダラスといってよい溝がある。このような途上国の政府は国民を代表していないと言っても過言ではないだろう。最底辺の、しかし最大多数を占める、農民の中にいて、「人民の、人民による、人民のための政府」という民主政治を意味する言葉の重さを噛みしめる。

政府が住民を代表していない場合、開発や防災のためのプロジェクトは、たとえ「政府が要請」したものであっても成立しないだろうし、たとえ強引に実施しても持続的に運営されることはない。政府の力だけでは維持管理ができないからである。日本が事業期間を終えて立ち去ったあと、直接の受益者に事業を引き継いで運営していくための経済的・技術的な実力がないからである。日本が建設した建物や設備は時間とともに朽ち果てるか、その間は政府の実力者に流用されるか私的に利用されることになる。

食うに事欠く貧者が殺人兵器をもてあそぶというブラック・ユーモアごときの現実が解消されて、自助努力に目覚めた農民の耕地を保全する事業が早期に再開されることが望まれる。